
伝文

日本口承文芸学会 会報
第73号 2023年9月 発行

日本口承文芸学会
〒663-8184 兵庫県西宮市鳴尾町1-2-18
武庫川女子大学教育学部 SE-401 (高木史人) 研究室
Tel.: 0798-31-0546 (直通)
E-mail: info@ko-sho.org

新たな物語の時代に

丹菊逸治

2023・2024年度の会長を務めさせていただくことになりました丹菊逸治です。若輩者ですが、会員のみなさまのお役に少しでも立てれば、そして学会活動を通じてわずかなりとも社会に貢献できることがあれば幸いと存じます。今後ともみなさまのご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

過去3年以上にわたり、コロナ禍は多くの悲しみと辛苦をもたらしました。私の専門はサハリン地域の言語・口承文芸研究ですが、フィールド調査は全くできませんでした。一方、それに対抗するようにオンラインによる研究・文化活動も進展し、改めて従来の知の在り方や出版文化には厳しい時代であると改めて気づかされました。多くの論文がネット公開され、電子書籍ならば国外の本も簡単に手に入ります。図書館はネットで書籍の画像を提供してくれ、口承文芸の各種電子アーカイブは録音とその文字化テキスト、語りの動画まで多様な資料をネットで提供してくれています。

日常生活も変化しています。若い世代には手書きの手紙ではなく携帯端末でのテキストメッセージが日常の一部になりました。ネット動画配信はテレビすら窮地に追いやりつつあります。

このような時代ですから、伝統的な口承文芸はもはや存在すら忘れられつつあるように見えます。日本口承文芸学会にも会員数減の傾向があります。大学等における研究者ポストの減少も非常に厳しい状況です。

しかしこれらの変化が示すのは混乱ではあっても、必ずしも衰退ではないでしょう。大きくみれば「物語」はますます求められています。ネット上の文字文化は隆盛しています。そして文字文化は即時性を増すことによって、その性質を口承文芸に近付けていく。このような状況下で「物語」が要求され大量に供給されています。残念なことにそこにはデマや誤報が飛び交ってもあります。物語は質・量ともに供給過多ともいえる状態です。

それらはかつての文字文学とも口承文芸とも異なるのでしょう。しかし従来の枠にはまらないものであればこそ、従来の各研究分野すべてが取り組んでいかななくてはならないものなのでしょう。

実際のところ、口承文芸研究は停滞しているどころか各分野で新しい動きが始まっています。例えば、これまでに構築されてきた電子アーカイブを利用した分析が盛んになってきています。今後数年、いや数十年は分析とそれによる新たな見取り図を前にして新たな時代となっていくでしょう。

物語の作り手として生きるにせよ、聞き手として生きるにせよ、あるいはまた、研究者として生きるにせよ、本学会にはそれらを兼ねる人が多いわけですが、それぞれの立場で専門家としての責務をますます感じていくことになるのだらうと思っています。今後とも会員のみなさまの益々の御清栄をお祈り申し上げます。

(北海道)

シンポジウム「危機のフォークロアと〈口承〉文化」報告

山田 巖子(青森県)

3月の例会は2023年3月18日(土)にオンライン開催でされた。例会のテーマを構想したのは2022年5月のことで、新型コロナウイルスの猛威がまだ衰えないときであった。ロシアのウクライナ侵攻、廃炉の見えない福島第一原発とトリチウム汚染水海洋放出計画など、「危機の時代を生きている」という実感を持っていた。3月例会には同時代性のあるテーマをと考え、その際に、川村邦光が提唱した「危機の民俗」という概念を用いることを考えた。

川村邦光『〈民俗の知〉の系譜』(2000年 昭和堂)の中に次のような記述がある。1983年5月の秋田沖を震源地とする地震のニュースで、子どもを海にさらわれた母親が茶碗を逆さまにして箸で叩きながら、海に向かって子どもの名前を呼んでいる映像がテレビに映る。このような身振りを、川村氏は、「危機的な状況に遭遇するにおよんで、奥深い記憶の底から呼び覚まされた」「いつかどこかはわからないが、おそらく幼いころ、眼にしたか、祖父母や両親がするのにならって行ったであろう行為」が「突如として噴出」したと述べ、そのような行為や現象を川村氏は「危機の民俗」と呼んだ。

川村氏の論を受け、さまざまな種類の危機に「とっさに」起こす「行為」や「発話」がどのような様相を示すのか、また、それは時間の経過によってどのように変容するのか、三人の登壇者にそれぞれ語っていただくと考え、このシンポジウムを企画した。

最初の登壇者は、飢饉の記憶とその語りを記述してきた野村敬子氏で、今回は「口語られる飢饉—山形県真室川町の場合—」と題して発表した。野村氏は『女性と経験』15号(1995年)に「昭和9年飢饉の年—伊東ヨソノ媪口語り—」を書き、「危機」から時を経て「語り」として昇華された事例を紹介している。今回は「凶作話」と呼ばれる話群の背景となる女性達の生活と、飢饉への備えである食べ物の備蓄、飢饉を語ること自体を禁忌とする共同体の教えなど、「危機の経験」自体を詳細に語られた。野村氏の発表自体が一つの「語り」であり、「危機の経験」をリアリティのある声と言葉で耳にすることができたことは口承文芸学会として大きな収穫であった。

もう一人の登壇者は美談研究を牽引してきた重信幸彦氏で、今回は「危機と『美談』」と題して、大正時代の大震災の後に東京府が出した『大正震災美談集』(1924年)と、『新修福岡市史特別編 福の民』(2010年)を取り上げた。前者は震災における帝都の壊滅と朝鮮人虐殺という恥ずべき凶行の二重の「危機」を受けて、「震災後の美しいふるまい」を蒐集しようとした善行調査者の「話」への態度を分析し、「美談」ではなく「事実」を蒐集することが目的であったことを示した。後者は衰退する地方都市の商店街で、昔ながらの商売に向き合う人々の姿をささやかな「美談」としてすくい上げる資料集を「シン美談は可能か」という問いのもとに示した。一瞬にして壊滅的な状況に陥る震災の「危機」とゆるやかに衰退してゆく「危機」という二重の危機のありようと、流通させることを目的とした「制度としての美談」と日常で紡がれる「経験としての美談」の二重の美談のあり様を示した。

最後の登壇者は川島秀一氏で、筆者は東日本大震災後の川島氏の仕事に、「危機の民俗」と関わる対象が多く含まれていると思ってきた。今回は、「漁労の危機に立ち向かう人々」という題で、福島県の漁業の現場で、漁師達の海や魚への認識とそれを表す言葉や振る舞いを示し、トリチウム汚染水放出という施策との埋められない齟齬を示した。川島氏の発表は、より身体に近いところから発せられ、

現在進行形の「危機」を語る「語り」といえる。この発表は、汚染水の海洋放出が、漁師達の海への愛情と仕事への誇りをふみにじるものであることを如実に示した。

シンポジウムでは活発な議論が交わされたが、最後に課題を一つ述べておきたい。この原稿をしたためている3月29日にはすでにトリチウム汚染水の海洋放出がなされた後である。危機の際に誰のどのような「ことば」が流通し、誰のどのような「ことば」が流通しない／できないのか、というシンポジウムの中での問いは、現実に生きる私たちの「問い」でもある。

第47回日本口承文芸学会大会・報告 於 学習院大学/ZOOM 併用

2023年6月3日(土) 【公開講演】

真下 厚氏「民間説話の声と文字—奄美・沖縄民間説話の世界から—」

米屋 陽一(千葉県)

1978年(午年)12月、12年に1度行われる神事「イザイホー」を見るために初めて沖縄・久高島に渡った。口承文芸研究とは何かを深く考え始めていた頃、川田順造氏の『聲』(1988年)が刊行された。口承文芸研究の原点的な問いかけがあったような気がした。

真下厚氏の『声の神話—奄美・沖縄の島じまから—』(2003年)が刊行され、話題になった。

「民間説話の声と文字—奄美沖縄民間説話の世界から—」と題した真下氏の講演は、その延長線上にある。内容は「宮古島の民間説話」の概説、「民間説話の記述 声から文字へ」「御嶽由来記」〈漲水御嶽〉(本文)などの紹介。次いで、池城英子の語り「漲水御嶽の由来」(『城辺町の昔話』所収)を取り上げ、宮古島の口頭伝承・語りの中には繰り返し表現が多々あるが、共通語で語るとほとんど繰り返し表現がないと指摘する。続いて、「宮古島の民間説話における繰り返し表現」「繰り返しの語句の意味・機能に着目しての分類」がなされ、展開、補足、追加、言い換え、強調・反復・継続などを紹介。それに対して、「本土地域の昔話における繰り返し表現」、池田たきの語り「難題聲」(『蒜山盆地の昔話』所収)を取り上げ、展開、補足、追加、強調・反復・継続などを紹介。さらに、「民間説話の声の表現」(繰り返し表現・鍵語・対のことば)、「語りの世界の立体化・構造化」として、前里財義・久永ナオマツの語り「魚女房」(『城辺町の昔話』・『葛山民俗』第2号)を取り上げ、前者を〈信仰〉神の使いとしての魚、〈環境〉環礁・遠浅の海、後者を〈妻との離別〉、「びい・びり」をめぐる対話、「子(ふあ)ぬ父親(いざ)」「子(ふあ)ぬ母親(んま)」という対のことばを指摘する。

〈「声と文字」という問題について早くに着目したのは岩倉一郎氏であった〉という。岩倉の編んだ昔話集は「古代歌謡を記録する方法のようだ」と指摘し、「宮古島に連れて行って、語りを聴かせて、意見を聞いてみたい」と結んだ。

蛇足かもしれないが、講演後、目白駅近くの居酒屋で久しぶりに再会した真下氏を囲む5名の宴があった。講演とは一味違う談笑する真下氏、南島に足繁く通い聴き耳を立ててきた同氏の姿を重ね合わせた。その先には、柳田國男、折口信夫、岩倉一郎…がおり、その口承文芸研究の流れの中に、真下厚氏も位置づけることができた。真下氏には『万葉歌生成論』(2004年)『歌を掛け合う人々 東アジアの歌文化』(共著・2017年)などがあり、併読をお薦めしたい。

藤井 貞和氏「構造と動態」

藤久真菜（兵庫県）

藤井貞和氏の「構造と動態」と題する講演の資料はB4用紙で計3枚。文字、地図、表、画像、種々の情報が用紙いっぱい、縦横無尽に広がる。中でも、手書きの編年表は、講演の羅針盤となって私たちを導いてくれる。

「神話紀」「昔話紀」「フルコト紀」「物語紀」「ファンタジー紀」という五紀が、亀裂を挟みながら、私たちの生きる現代へと地層のように連なる。今回焦点のあたる「神話紀」から「昔話紀」（縄文時代から弥生時代）への移行期には、「戦争」「水田」「危機のライン」という語が見える。稲作慣行とそれを携えた人々とが押し寄せてくる。その衝撃のうちに、昔話が大量に生まれ、活性化していくという見取り図だ。レヴィ=ストロース氏の著作群、特に『神話論理』が構想を力強く支える。歴史学上の時代区分に沿って、個々の文学作品を並べた文学史とは異なり、文学の側から試みる編年が新鮮で、視界がひらけていく。

実践編として、ちいさんが語る『吹谷松兵衛昔話集』「喰わず女房」の資料が提示される。頭の真ん中にぽっかり開いた大きな穴に、おにぎりを「ほら喰い そら喰い」と投げ込む女（その場面には、ぽっかり開いた縄文土器の中に、弥生の象徴とも言えるお米を放り込む像が重ねられる）。その姿を見られた女は、実家へ帰るからと、男に桶をひとつ所望する。そして、男をその「桶中へクルンと」入れてしまうと、鬼になって、男の入った桶ごと山の方へ走って行く。

資料の配置の仕方が独特で、おもしろい。B4用紙の長辺を右から左へ目で追っていたのが、「クルン」を境目に、短辺へと直角に回転して向きを変える（回転軸に『富嶽三十六景』より桶職人の絵を貼付）。お米にまつわる語が連続して出てくる前半部と、女が鬼に戻って神話紀へ遡っていく後半部。その二重構造に呼応して、回り舞台のように切り貼りしてある。手で用紙を回し、「クルン」を自ら体感することで、ちいさんの「喰わず女房」が今までとは違った様相で迫ってくるように感じた。

発せられては消えていく声によって耳に届き、それを脳内でありありと視覚化して受け取る。文字を消し去れば、聴覚から視覚へと、とどまることなく展開する口承文学の動態が浮かび上がる。ムカシを聴きながら、これはあそこの井戸、あの土手と、実際の場所を想像する。「映画館があんだ、こん中に」と頭を指さして教えてくれた、福島県岩瀬郡天栄村の星絹江さんの言葉を、講演の最後に思い合わせた。

近くを見続けると遠景に目が慣れず、その反対もまた然り。細やかに見つめることと、広く俯瞰することとの往還を目の当たりにして、思考の凝りがほぐされる。

【研究発表報告】6月4日（日）

中川 裕（千葉県）

藤井 倫明氏「瓜子姫の名称」

「瓜子姫」という呼称が標準的な名称として定着した経緯について考察した発表。採録資料では「瓜子姫」と呼ばれるものは多くない。瓜姫系統は中部以西、瓜子姫系統は東北から北陸にかけて、織姫・

姫系統を含むその他の名称は全国的に分布。「子」は東北地方に多く見られる指小辞と考えられる。瓜子姫系統は「瓜子姫」「瓜子姫子」「瓜姫子」の三種類に分けられる。「瓜子姫子」はおもに東北の東側。「瓜姫子」は東北の西側。「瓜子姫」は特に偏りはない。近代以前の文献では「瓜姫」の名が見られる。戦前においては「瓜子姫」が一般的であったわけではなく、「瓜子姫」が学術文献で標準的な名称になったのは、柳田国男が『桃太郎の誕生』その他の著作で「瓜子姫」を標準名称として扱ったことの影響が大きいのではないかと考えられる。「瓜子姫」という名称が一般化したのは昭和に入ってからであり、柳田に加えて平井芳夫の『うりこ姫』（講談社）という絵本の影響が大きい。平井が「瓜子姫」という呼称を用いたのは彼が「うりこ」を固有名詞と勘違いしたせいだと思われる。結論として、昔話の学術的な名称としては「瓜姫」、一般的な名称としては「瓜子姫」が適当なのではないか。疑問点として、東北における「瓜姫子」「瓜子姫子」の分布の違い、西日本でも「瓜姫子」「瓜子姫子」のように「子」を使った名称があるのはなぜか、柳田がなぜ「瓜子姫」を使用したのか、といったことが残されている。

安田 千夏氏「アイヌ語アーカイブ 散文説話にみるクマ神の処罰と救済」

本発表は北海道白老町の国立アイヌ民族博物館所蔵のアイヌ語アーカイヴから、クマが登場する散文説話 (uepeker) を対象として分析を行ったものである。同アーカイブ中の口承文芸 207 編のうち、人に悪意を持つクマ神の話は 19 編で、それ以外の話 7 編の倍以上になる。伝承中では人間に悪事を働いたクマは人間によって処罰されることが多い。しかし中には救済される例もある。一般に悪いクマは散文説話中で、ツノがある、体が大きい、毛がはげている、毛色が変わっている、四つ爪、山すそに住むという特徴を持つ。同アーカイブ中の静内町織田ステノ氏の伝承に登場する悪クマは、山すそに住み、巨大で毛のはげたクマの姿、あるいは頭のはげたみすぼらしい老人の姿で登場する。同氏の伝承においては悪クマが救済される例が多く、襲撃→殺害・抗議→謝罪・弁明→救済 (情状酌量) →解決 (守り神となる) という構成を持つ。ただし、同一と思われる話でも展開が異なる場合があり、襲撃→殺害・抗議→謝罪を経ながらクマを処罰して終わる例もある。これについて安田氏は、採録年代である 1980 年代に、語り手の織田氏はテレビの時代劇を愛好しており、それが物語を変容させて、遺族の心情を配慮した処罰という結末になったのではないかと考察をしている。この結論に対して、一方の展開から他方への変容と考えるより、織田氏の中にふたつの価値観が併存している考えることはできないかという質問が会場から出た。

藤井真湖 (愛知県)

蒙古 貞夫氏「モンゴル民間芸能者の農耕祈願とその唱え言葉」

「内モンゴル東部地域」は清朝中期頃より漢人の入植が進んできた地域である。他の地域に比べ混住・農耕化だけでなく、モンゴル人と漢人の婚姻も進んでいる。端的に言えば、モンゴル人→牧畜民、漢人→農耕民といったイメージを持つことのできない地域となっている。本報告は、具体的な調査地は不明であるものの、こうした地域におけるモンゴル人の農牧民が年中儀礼としておこなう「シャンシィン木」「ボロ (農具ボロ) ティヒフ」という二つの祭祀と臨時祭祀の「ロスティヒフ」についての概要と祈祷文の紹介である。

農具ボロ以外の祭祀はモンゴル各地で見られる降雨祈願としてのオボ儀礼との共通点があるように思われる。シャンシィン木はシャマニズムとも関連する木であるが、雨乞いの際にも用いられていたという報告があるし、降雨祈願の「ロスティヒフ」の「ロス」は元々は人格化された龍王ではなく土

地の精霊を意味する「ロス・サブダック」であったと考えられる。ただし、諸儀礼において主導的な役割を果たしているのがホールチと呼ばれる芸能者だという点は興味深い。仏教僧侶が主導するオボ儀礼では見られないからである。ぜひ、オボ儀礼との関連でも当該儀礼を位置付けてほしい。

さらに、報告者の調査地域の儀礼を複数地域との対比、例えば、地域的特質、民族の生業形態、民族の人口割合等に関連付けて検討するならば、立体的な研究が展開できるように思われる。今後に期待したい。

山田 徹也氏「家屋の精霊、死者の民間信仰と前兆の関係性について

—北ロシア上トイマ地区における調査結果から—

本発表は、社会主義体制が崩壊して以降の1995年よりコロナパンデミック以前の2019年までの約四半世紀の間に計5回行われた、日本人フォークロア研究者たちによるロシア連邦アルハンゲリスク州上トイマ地区を対象とした民俗学調査の報告の一部である。今日のウクライナ戦争が終結した暁にはぜひ調査が継続されることを願うばかりである。貴重な一次資料が追加され、共時的のみならず通時的な研究の幅がさらに広がっていくに違いない。

ドモヴォイという家屋に棲むとされている超自然的存在の前兆や夢を通じた死者による警告の事例はいずれも叙述内容そのものが興味深い。前者のドモヴォイは吉凶併せ持つ両義的な存在である点も注意を引く。こうした両義的な超自然的存在はロシア正教会の教義とも相容れないであろうから、正教会の聖職者たちがこのような現象をどのように見ているのかも知りたいところである。

体験であれ、夢であれ、語り手にとってはいずれもリアルなものとして受け取られている。ここで紹介された多くの事例は文化人類学における災因論で説明しうるようなナラティブになっているが、そうした災因論的ナラティブを成り立たせている社会とはどのような社会なのかもさらに検討する余地があるのではないかと思われる。たとえば、事例の中には「アパート」や「戦争」といった語彙も見え、現代的な文脈がこの民俗現象に組み込まれていることが暗示されている。継続的研究に期待したい。

藤田 護氏「アイヌ語口承文芸のデジタル・アーカイブ構築と語り手研究」

近年、デジタルアーカイブで公開されるアイヌ語口承文芸資料が急激に拡大してきた中で、氏名非公開の語り手の「語り手論」は可能かどうかを問おうとする研究である。発表を聞いている際には気づかなかったが、レジュメを読み返してみると、当該研究が野心的な試みであることが理解された。

報告者は“ゼロ人称”という時枝誠記氏の言語学の概念を援用しつつ、語りというものは生身の人間の語り手と“ゼロ人称の語り手”との相互作用によって形成されるとする。“ゼロ人称の語り手”とは語りの裏側に常に張り付いて語りをも可能にする人称であり、語りの文体を受け持つ。要するに、考察対象は語りの文体である。文体を通して生身の人間たる語り手への想像が可能になるという論理である。野心的な試みというのは、文体は語りを覆いつくしているため、語り手の社会的背景や人生経験を重視してきたこれまでの語り手論が生身の人間に依拠しすぎており、生身の語り手こそ外在的存在ではなかったのかという逆説も可能になるからである。

結論部分では氏名不詳の語り手の語りの特徴として5点が挙げられているが、(1)自分の語りについて頻繁に省察して表現を加えている特徴は、(2)(4)(5)の相関関係から見えてくる、主人公(アイヌ)が社会的に劣勢である状況が多いことや、(3)女性の活躍の多様性、という現実認識の確かさと呼応しているように思われ、語り手論の可能性がうかがわれた。

内藤 浩誉氏「化粧井戸に見る水の神女考—神奈川県横浜市の北条政子伝承を事例に—」

かつて日本中世史研究者の豊田武は、『英雄と伝説』で「巴御前の物語」を論じた。伝説と結びつく女性の多くは、こうした権力者に討たれた男に仕える一方、芸能者として漂泊した経歴を持つ人物像を持っていたといえよう。内藤氏が長年考究されている静御前は、今述べた女性像を有する伝説と理解できる。今回のご発表は、これまでのご自身の研究をふまえ、それをより昇華させる意欲的なご発表だった。

具体的には、神奈川県横浜市区南区井土ヶ谷の真言宗乗蓮寺境内にある北条政子ゆかりの化粧井戸に関する伝説について化粧の色が示す「白」の意味や水と女性の関連性などを考察された。こうした伝説の特徴として境界性を持つことについても指摘された。

ご発表をうかがって評者が受けた率直な感想は、政子の伝説が認められる井戸やカヤなどについて、乗蓮寺の僧侶やその檀家の方々、あるいは周辺住民の人々が、どのような関心を抱いているか（抱いてきたか）をもう少し掘り下げる議論の必要性を感じた。ご提示の事例では、権力者政子が化粧をしたことや母乳の出がよくなるなど女性的側面が強調されている。地域の人々は、ある意味相反する人物像を持つと理解できる政子をどのように受けとめてきたのか。こうした観点から伝説を取り巻く受け手の思いや需要のされ方などを分析することで、伝承地域における固有名詞を持つ伝説の存在意義や意味づけのされ方についてより明確な議論ができると思われる。

玉水 洋匡氏「松尾芭蕉不明句から伝・芭蕉翁詠句への道筋—松尾芭蕉手彫りの句碑を基にして—」

文学碑はなぜ建立されるのか。著名な歌人や俳人、あるいは文学者のことばは、土地と結びついたものも多い。しかし、土地と結びつきが薄い文学者のことばを碑文として建立する意味は、見出しがたいだろう。玉水氏のご発表は、こうした建立意義を見つけづらい地域における芭蕉の句碑について考察された。

愛知県各務原市鵜沼宿に「ふく志るも喰へは喰せよきく乃酒」と芭蕉が句作し、それを自ら彫りつけたとされる碑が建立されている。しかし、この句は、『校本芭蕉全集』などに収録されていない。玉水氏は、こうした発句について「不明句」という分類案を提示された。また、特定の家では、芭蕉は鵜沼に来たとされている。だが、それを根拠づける史資料等は、現在確認されていない。では、こうした地域で、なぜこうした句碑が建立されたのだろうか。

玉水氏は、こうした行為の背景について「地域の権威化という意図があると言えるだろう」と結論づけている。大方の議論は首肯できる。しかし、「地域の権威化」なら、なぜ「松尾芭蕉」でならなければならないのか。あるいは、鵜沼宿に立ち寄った明確な記録がない芭蕉をなぜ権威化の対象として持ち上げ、それを宿場全体として支える行為となし得たのか。こうした行為を支える「芭蕉翁顕彰会」の創設経緯は、どのようなプロセスを経たものか。こうしたことについて細やかな検討をさらに推し進めることで、今回の結論がより強固なものになると感じた。

真鍋 昌賢氏「CMに取り込まれた浪曲の声—高度経済成長における位置づけの考察にむけて—」

くらしの中の声は、スマホが普及した今日、肉声よりもメディアを通して耳に入る。真鍋氏のご発

表は、こうした声を口承文芸研究の中にどう位置づけるのかを模索した興味深いものだった。

ご発表の内容は、幕末期から明治初頭にかけて、浪曲の声は、眼前の客を楽しませるためだけでなく、小屋の中に客を呼び込む声としても機能したことを指摘された。太平洋戦争後、民間放送が漸次開局されたなかで、昭和30年代前期くらいまでは、ラジオの浪曲番組は聴取率も高く、多くの企業も浪曲番組のスポンサーとなった。しかし、1960年代に入ると次第に聴取率も伸び悩み、浪曲は娯楽としてしだいに下火になっていった。しかし、その状況を逆手にとって、浪曲がテレビの西部劇「ローハイド」を提供した洋酒会社のCMとしてその会社の人気キャラクターとからみヒットする。大衆芸能として斜陽を迎えていた浪曲の声は、奇しくも洋酒会社のCMの声として幕末期と同じ機能を果たしたと結論づけた。

ここで注意したいのが、真鍋氏が発表題目を「浪曲の語り」とせず「浪曲の声」としている点である。それは、声が織りなす関係性や反応、あるいは状況の分析が口承文芸研究において必要だと説く真鍋氏の主要研究視角と無縁ではないと評者は考える。「語る」や「話す」といった動詞の概念でとらえる口承文芸研究からふみだし、口承文芸の研究視角を押し広げる成果として本研究を位置づけることができるだろう。

【シンポジウム】 「話型論の展望」 雑感

高木史人（兵庫県）

昨年の大会後、加藤耕義さんと来年はどうしようかと大通公園辺りを逍遥しつつ話したかも知れない。「話型論の展望」というすてきな題名は、加藤さんによる（その後大会委員の米屋陽一さんにもご相談して背中を押していただいた）。

しかしていまここで（昔話の）話型論が隆盛を極めているかと問われるならば、それはもう終わったことで構造分析やパフォーマンス分析、あるいはメディア論的分析に取って代わられた前世紀の遺物扱いをする向きもあるかも知らない。

けれども日本列島の諸言語圏（Unicefでは日本列島にアイヌ語を含めて9言語あるとする）内の昔話（あるいはそれに相当する諸言語による昔話に相当する伝承）群の過去から現在に至る全体を把握し示そうとしたいとなみとして、話型は疎かにできない。話型をどのように活用し、将来の口承文芸研究者に引き継ぐか。私たちは大きな責任を負っている。

大会委員会で考えた趣旨は、以上のようなことだった。そうして成立順に柳田國男『日本昔話名彙』（高木）、関敬吾『日本昔話集成』『日本昔話大成』（加藤さん）、稲田浩二『日本昔話通観』第28巻（鶴野祐介さん）を比較して、それぞれの特徴（特長と課題と）を示すとともに、日本列島での話型研究史を相対化するために、中国（55の少数民族が存在するという）の話型研究史（立石展大さん）、ヨーロッパから見たハンス＝イェルク・ウター『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』（ATU）の分類（加藤さん）をそれぞれ参照しようとした。

言わずもがなのことだけれども理事は会長のリードのもと会員の利益になる活動を志そうと努力する。大会委員もその一念である。

口承文芸は領域が広範であり昔話だけが対象でない。だから今回の「昔話」という設定は偏っているのだが、加藤さん、米屋さんと私という偏りの中で、口承文芸研究に携わる多様な会員に役立っていただけるように、最善を尽くしたつもりだ。

ちょっと踏み外しを記すが、講演に真下厚さん、藤井貞和さんをと大会委員会から運営理事会の議

を経て依頼したのも、真下さんにはシンポジウムで十分に扱えない南島（6言語を有する）の昔話伝承の様相を深く論じていただけるならば、また藤井さんには地域の広がりを時間の広がりに変換していただけるならばありがたいとの思いであった。お二人には明確にお伝えしななかつたけれども。密かに期待していたことは十分以上に叶えられたと深く感謝する。

なお私事ながら、以前「話型の展開」（『民俗学事典』丸善出版）という小文をものしていた。ご参照くださるならば幸いである。

以下、当日気づいたことやその後考えたことなどを思いつくままに私見を述べる。

1. すいぶん以前、説話・伝承学会だったかと思うが、会場で小松和彦さんが物語の発生についていくつかの仮説を紹介したことがあった。記憶で記すが、脳の働き（意識/前意識/無意識？記憶曖昧）によって物語が発生する、言語の構造の外延として物語が発生する、社会構造（男/女、親/子等）の反映として物語が発生する、等々。でもわからないと。話型はいったいなぜ、どのように、認識する（認識される）のだろう。

2. 私は飯豊道男さんを高く評価している。飯豊さんのように1970年ごろにゲルマン語圏の就中ドイツやオーストリアで昔話のフィールドワークをして昔話集を刊行した研究者がどれくらいいるのか知りたい。飯豊さんの思い出話に、昔話はビュッフェでしたが父親が息子にしていた。村の顔役が家に来た時、昔話が終わるまで室内に入らず待っていた。昔話は上の階級のものは加わらない。昔話は父から息子に伝える場合が多い。私はこの話を伺って、男性原理/女性原理という精神分析的図式で西洋昔話と日本昔話との違いを論じる河合隼男説に不審を持つようになった。話型論はまずフィールドワークからの知見を第一に立論すべきではないか。話型論にフィールドワークの知見をどう生かすかは大きな課題だと考える。

3. 柳田國男の「椰子の実」由緒譚は怪しくないか。兄・井上通泰『南天莊雑筆』の緒言（1930年、QRコード）がどうしても気にかかる（みんなで歌えたのは久しぶり。とても楽しかったが!）。「話の贈呈」といういかにもネット上でも受けそうな美談の話型には十分に注意したい。



4. 来年は今井秀和さんチームです（共立女子大学予定）。存分に、
よろしく願います。



事務局便り

○受贈書籍（2023年2月～2023年8月受け入れ）

- ・日本民俗学会『日本民俗学』第312号～第315号 2022年11月、2023年2月、5月、8月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第55巻10号～12号、第56巻1号～3号 2023年1月～2023年6月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』39、40 平凡社 2023年3月、7月
- ・熊本大学民俗学研究室編『三ヶ浦民俗誌―せせらぎの故郷―』（熊民叢書16）熊本大学文学部民俗学研究室 2023年3月
- ・乙女文楽研究会編著『乙女文楽―開花から現在まで―』大阪大学出版会 2023年3月
- ・中山正典著『農と水の民俗 人神信仰と農業用水』昭和堂 2023年4月
- ・及川祥平著『心霊スポット考 現代における怪異譚の実態』アーツアンドクラフツ 2023年6月
- ・横道誠著『グリム兄弟とその学問的後継者たち―神話に魂を奪われて―』ミネルヴァ書房 2023年9月

○事務局が下記に移転しました

〒663-8184 兵庫県西宮市鳴尾町1-2-18
武庫川女子大学教育学部 SE-401（高木史人）研究室
Tel.: 0798-31-0546（直通）
E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<https://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。

入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。